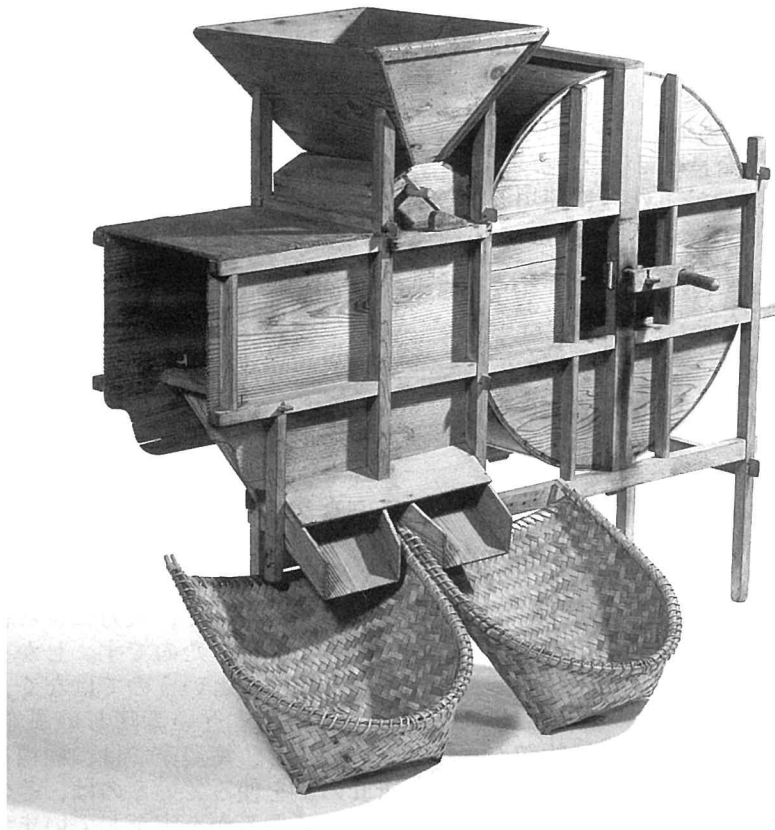


民俗博物館だより

Vol. 28 No. 2

2001. 12. 15



▲ 唐箕 明治20年(1887)の銘文がある(当館蔵)

目次

収蔵品展 奈良県の古農具(大和の農村と農業技術史)

風を生み出した箱—唐箕—..... 1

[研究ノート]

卯杖・卯槌と削り懸けについて..... 5

お知らせ..... 7

風を生み出した箱—唐箕—

平成13年12月8日(土)▶平成14年9月1日(日)

浦西 勉

奈良県立民俗博物館が収集した古農具（注1）の中から、奈良県下の唐箕（とうみ）を紹介します。

唐箕とは、1960年（昭和35年）頃まで、4枚の翼を人力で回転させて風力を起こし、その風により米や穀物の実（玄米）とその籾殻、しいな（十分実っていない殻ばかりの籾、奈良県では「ミサオ」と呼ぶ）、ほこりなどを選び分けるために使用していた農具です。唐箕以前は、箕だけで籾殻などを取り除いていたのですから格段の技術進歩です。奈良県の農民の使った唐箕から見えて来る、郷土奈良の新しい歴史と文化の一側面を紹介します。

展示内容は、次の通りです。

- 1、箕から唐箕へ—近世大和の農民・唐箕の普及と農業技術—

風を生み出した箱—唐箕—

（農耕と自然—風—）

稲刈から収穫までの用具

唐箕とは（唐箕はどのように使われるか・農民の経験・唐箕の見方）

- 2、当館収集資料の唐箕から—唐箕の墨書名から見た(1)

箕から唐箕

唐箕の移り変わり（奈良県立民俗博物館が収集した唐箕を年代順に並べたら何が分かったか）

- 3、唐箕の墨書名から見た(2)—製作地と職人名—
唐箕はどのように伝播したのか
奈良県の唐箕職人の居たところ
唐箕の構造、唐箕職人

- 4、唐箕から見た郷土
西鶴『日本永代蔵』—大和の農民、「川ば

た九介」の知恵から開発された唐箕—農民が唐箕を必要とした理由—農村の変化—唐箕の現代—今も種籾をとるのに使う農家—風と農耕文化—日本文化の性格について—

さて、奈良県と唐箕の関係は、江戸時代、貞享五年（1688）に出版された西鶴の『日本永代蔵』に、大和の農民、「川ばた九介」の知恵から開発されたものと書かれています。その史実は、つまびらかではありませんが、何らかの根拠はあったのでしょうか。何故、大和の農民にて唐箕が開発されたと言われるのでしょうか。同時に、唐箕が持たらしめた変化は何だったのでしょうか。

おそらく、箕から唐箕の変化は、奈良盆地の米の生産が高かった、先進的農村だったと言う事が想像できます。日本でも稲作文化の最も進んでいた奈良盆地の、農民の農耕に携わる経験の密度の深さを見ることができます。籾殻などを取り除くためには、天然の風のみ相手にしてきた時代が長くあって、始めて、人力による箱型の風を生み出す農具を発明したのです。しかも、人力のみで風を起こすというのではなく、その風が自然の風に限りなく近い素晴らしい風を生み出したのです。今でも、篤農家では、種籾を採るためには、唐箕の風を使っているのは、その風が籾に如何によい風であるかを実証しています。長い積み重ねられた農民の経験から、唐箕の風が生み出されたのですからまさに農民の文化の結晶なのです。私達は、かつて、大和の農民が一年中吹く風を意識していたことを知るべきなのです。

同時にまた、箕から唐箕の変化は、大和の農村社会の構造や、農業経営に大きな変化が生じたこ



▲四季農耕図絵馬（當麻町立磐城小学校蔵） 明治30年（1897）の銘文あり・一年間の農作業が力強く描かれている。

とも意味しています。つまり農業の近代化が始ったということ。近年の農業問題を思うとき、唐箕という古農具から、農業の近代化とは何であったのかを検証する資料になりうるのです。以下の文章は展示の解説としてお読み下さい。

(注1) 古農具=ここでは、手動にて使われる概ね1960年以前の農具をこう呼ぶことにしました。

1、箕から唐箕へ—近世大和の農民・唐箕の普及と農業技術—

稲の収穫・調製用具の作業体系について示すと、①成熟した稲の刈取に始まり、②稲の乾燥、③粃(もみ)とわらの分離である脱穀、④粃の乾燥、⑤玄米と粃殻(もみがら)の分離である臼挽き、⑥箕や唐箕、とおしによる選別をし、玄米にて保存するまでの作業が有ります。この一連の作業のことを農業では収穫・調製と呼んでいます。

日本の農業は長い畑作時代を経験して、弥生時代になり稲の栽培時代を迎えました。

この収穫・調製作業は、古くは、銅鐸の絵や出土した杵の形から、刈取後、臼と立杵でこの穂をつき、脱穀・粃すり・精米を同時作業として行っていたのではないかとされています。しかし、脱穀、調製、選別にはどのような農具が用いられたか具体的について不明な点が多いのです。

格段と農業技術の発達した室町時代から江戸時代初期にかけては、古文書中には収穫・調製に関連した多くの記述が残っています。しかし、この時代に使われている具体的な農具になると、やはり明らかではない部分の方が多いのです。

江戸時代になって、宮崎安貞が『農業全書』(1697年刊)中の農業図に収穫・調製用具について描かれています。脱穀用具について、竹2本の間を稲穂を引き抜いて脱穀する扱箸(こきはし)などが示されています。これが、中世からの脱穀用具であったろうと想像されます。その後の調製用具について、『農業全書』に絵が描かれているのが、粃すりはより改良された土臼になっています。しかし、その後続く選別用具については描かれていません。

江戸時代中期の収穫・調製法としては、北陸の農業を紹介した土屋又三郎の『農業図絵』(1717)、に稲刈、結束、イネ(稲)乾燥(掛干)、脱穀(千

歯こき)、粃すり(木臼)、選別(ふるい・み・ゆり輪)、俵詰めなどが描かれ、当時の状況を知ることができます。古くから、米や穀物の実(玄米)とその粃殻、しいな、ほこりなどを選び分けるために使用していた代表的な農具は箕だったので。この収穫作業の体系が当時の一般的なものであったのでしょうか。しかし、近畿の先進的な農業技術はおそらくもっと進歩していて、大蔵永常の『農具便利論』(1822)には、扱箸にかわって脱穀能率を飛躍的に高めた千歯こきの記述があり、万石どおし、ゆり板などの改良された選別用具が示されています。おそらく近畿地方では、この頃に、箕によって唐箕が選別用具として使用されたのででしょう。

江戸時代中期(18世紀)に確立された、稲作体系は、戦前までほとんど変ることなく行われていました。それは、①手刈(鎌、鋸がま)―②イネ乾燥(天日乾燥、はざかけ)―③脱穀(千歯コキ、回転式脱穀機)―④粒乾燥(天日乾燥、一部に乾燥機)―⑤粃すり(土臼挽き、ゴムロール式粃すり機)―⑥選別(唐箕、千石とおし)という一連の作業体系が成立していたのです。今回の展示では、収穫・調製用具⑥選別に使われた農具「唐箕」を紹介いたします。

2、調製用具唐箕の出現

穀物の選別用具—選別技術の発達—

穀物の調製作業の主要な用具は選別用具です。選別とは脱穀や粃摺後の粃・玄米・しいな・粃殻等を選別分離する作業を言います。この調製に使われる用具の主要な農具は箕、唐箕、とおしが代表的な農具でした。

穀物選別用具を選別の方法によって分類すると、次の2種類となり、それに使われる農具を示すと次の如くです。

- (1)粒の比重により選別する農具。(箕・ゆり板・風起蒔・団扇・手回し扇風器・唐箕・石拔選穀機)
- (2)粒の大小により選別する。(とおし・萬石とおし・縦線選穀器)

以上は古くからの選別器の農具でした。



▲四季農耕図絵馬・唐箕を使う図



▲『日本永代蔵』井原西鶴(『日本古典文学大系』より)のさし絵

① 箕

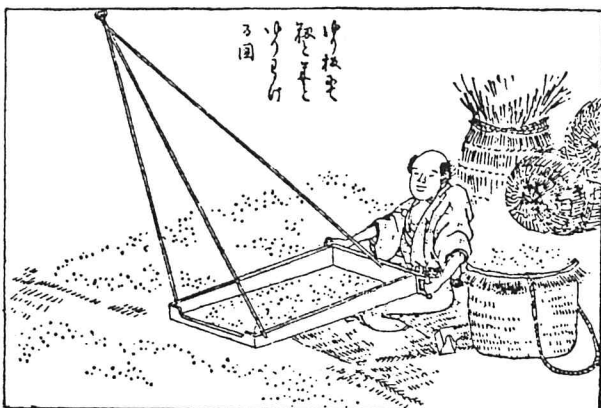
古代における選別の方法が、どのようにしておこなわれて、その用具はどのようなものかは、不明な点が多いのですが、収穫調製用具が千歯コキや土臼が徳川中期に確立した姿をそのままに持ち続けたのと全く同様に、選別用農具も同じく徳川中期に確立し、その後1970年頃までほとんど変化をみせなかったと思われます。

徳川中期の農書の比較的稲作の後進地帯の著書で、扱き箸・木臼の段階の農法を紹介する『耕稼春秋』（1707年）は、臼挽きが終わったのちの選別用の道具として次の農具が紹介されています。

「米通し四ツ、内壺ツ荒とほし、壺ツ中通し、壺ツ精とほし、壺ツは米とほし、箕二ツかくの如くにして凡道具六色なり」

粃の選別が「とほし(とおし)」と箕の二種類の道具によっておこなわれていたことが分ります。

箕は、少量の穀類を入れ、これを両手で軽くあげ、ゆすぶって粃皮や塵、埃等の雑物を除去する農具です。また、穀物調製作業や俵詰の際の運搬容器としても使用され、農家の欠くべからざる農具でした。箕に関して『倭名類聚抄』に「箕音姫、和名実、除糞簸米之器也」とあり、また、『倭訓栞』に「箕は皮穀をひて、実のみ残る器なれば名づくるなるべし」とあって箕の用途や言葉の意義が説明されています。『和漢三才図会』に「(前略)割楮皮爲経・破篠竹爲緯、織如鑽前作葉形、縁纏藤蔓」とあって、その構造もはっきり知ることができます。すなわち竹皮・藤皮・桜皮等を編んで、これに竹又は細大を結びつけたものでした。その容量は約1斗でした。これに少量の穀類を入れ両手で持って、軽くあげてゆすぶりながら、比重の大なる粒を残し、粃皮や塵、埃等の雑物を除去するので、後述のゆり板の代用ともなり、巧みにゆり動かせば玄米中の粃・屑米等を前端に集めて分離することが出来ました。昔は、箕の有名なる産地として和泉国大鳥御上村の箕が、「上村箕」又は「和泉箕」として知られたものでした。奈良県では、天理市檜、橿原市小綱の箕がよく知られていました。箕に酷似するものに麗簸(さしあけみ)があります。之に関しては『和漢三才図会』に「今多用箕及桶、匂風探之、則夫枇糠、俗調太夫流」と見えています。用途も箕と同じ様なもので、ただ箕よりも一層袋状に包まれたものでした。



▲ゆり板による選別（『農具便利論』）

② ゆり板

ゆり板もまた比重による選別用具で、浅底の長方形の箱で長さ1.2m(3.5尺位)、幅45cm(1.5尺)、深さ15cm(4.5寸)で、先端の方が狭くかつ浅くなっています。文政五年(1822)の農書『農具便利論』には「ゆりいたの図」が描かれています。これは、粃、小米などが多く混じっている米を少しずつそのなかに入れて選り分ける道具であり、その説明文によると「上に紐を付、手元の持手を両手に持、腰をすへ下腹を張、脊をそらし、骸を肩より調子つり合よくゆらりゆらりと振出す心地にて左右へゆり板をゆれば、粃は上にうきて、ゆり板の中に粃、しの字のこつく並寄也。是を済ひ取てよき米を得る也」ということであり、「誠に一粒よりのごとくになりて、御年貢米など調達速にしてはなはだ重宝なり」と書かれています。この農具は「用ゆるに甚上手下手」があり、「学ばざれば粃容易には分りがたし」といわれるほどに、修練を要するものでありました。江戸時代、近畿、山陽、中国で、年貢米の精選に用いられたものでした。熟練を要するが少量を精選する時に役立つものでした。

③ 風起し筵・手回し扇風器

脱穀後の穂切れと茎葉屑等との混合物を分離する時に、これらの混合物を摘み上げて上方から落下し、自然の風を利用して選別することは一般農家でもよく行いました。もし風のない時は人工風を起すこともありました。風起し筵も人工風を起す原始的な方法で、現今ではあまり行われませんが古い方法でした。下図に示す様に、筵の端を折り曲げて、その中に1人が立って筵の両端を握り、これを合せる様に動かして風を起し、また1人は箕を高く差し上げ、その中の選別物を少しずつ落下させ、重さの差によって穂切れや実は容器の直下に落ち、藁屑、粃皮・埃などは先方まで飛ばされました。古く東海道筋でよく行われた選別方法であるといわれています。

手回し扇風器による選別作業も行われました。これは簡単な木枠の上に3、4枚のプロペラ状の



▲風起し筵による選別（『農具便利論』[1822年]）

起風車を設け、手回し用把手を回転させ、歯車機構によって、起風車が急速に回転して風を起す様になっていました。この風により、穀物を選別するのです。

④ 唐箕

唐箕は穀物の選別の主要な農具でした。唐箕に関しては『和漢三才図会』に「麗扇俗唐箕、太字美」と出ており図が示されています。また、『近代世事談』に「元禄の頃(約250年前)に至り、犁・麗扇・土臼等の外国より傳はれり」とあって、中国から渡来したようです。そこには、唐箕は略字で正しくは麗扇と示され、中国から伝来した為に唐箕の字を使用するようになったものと思われると説明してあります。

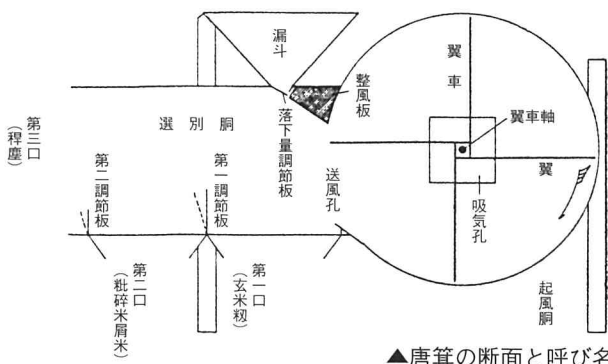
さて唐箕は稲類・豆類・菜種その他各種作物の種籾の選別に欠くべからざる農具で糠皮・塵・埃を除きさらに完全粒・不完全粒・碎粒等に分離し、能率高く選別する用具となっていることは、箕の遠く及ぶ所ではありません。その選別作用は比重で、重さのみによって分離するものではなく、玄米粒とそれよりも重い綿の様なものを混じて選別する時に、重量の重い綿は第一口に落下せず遠くに飛ばされます。即ち、表面積の大なる比重の小なるものは遠くに飛ばされ、砂粒の様な比重の大なるものは、第一口・第二口・第三口に吹き出されるわけです。

唐箕の構造

唐箕の外観は下図に示す如くの構造です。略述すれば起風胴は太鼓形の胴で、中央には普通4枚の翼からなる翼車があります。起風胴の両側中央には方形または円形の吸気孔があり、翼車の回転によって起風胴内の気圧が低下し、この吸気孔から外気が吸い込まれます。そして、起風胴の前方上端に穀粒を入れる漏斗があり、漏斗下から穀粒を徐々に落下させる時に、起風胴からの風力によって、夫々漏斗の直下・前方・最前方の3口に分離されます。直下の口を第一口、次を第二口、外部を第三口と名づけています。第一口と第二口、第二口と第三口の境界には調節板(あるいは堰板)があって、この板を加減して選別効果を一層発揮する様になっています。唐箕の耐久力は3、40年以上に及びました。

(1) 全形および重さ

唐箕は長さによって1.2mから1.5m(4-5尺)



▲唐箕の断面と呼び名

の大型、1 mから1.2m(3.5-4尺)の中型、1 m以下(3.5尺以下)の小型とに分つことができます。幅は普通30cmから45cm(1-1.5尺)です。次に重量は25kgから30kg(7から8貫)が普通です。元来、唐箕は比較的移動運搬の多いものであるから選別が良くて能率が高ければ、小型で軽量のものを可とするが、風速よりも風量に重きを置くので、大型の唐箕のほうが結果的によいのです。

(2) 漏斗および落下量調節板

漏斗の地上からの高さは普通1.2m(3.5尺)足らずで、この程度までならば作業に差支はないが、これ以上になると婦女子の使用には困難となります。漏斗の容量は普通360リットルから450リットル(2から2.5斗)です。漏斗下の落下量調節板には単式と複式とがあり、前者は1枚の開閉板を水平式は蝶番式に開き、後者は2枚の開閉板の蝶番式あるいは観音開き式があります。単式では流量が不均一となり勝ちですが、複式ではこのようなことが少ないのです。

(3) 起風胴および翼車

翼車を収めてある起風胴の形状は普通円筒形です。唐箕では吸気孔の中心と送風孔の中心とが同一線上にあるか、或は翼車軸の中心が、送風孔の中心を通る水平線よりも上位にあるものが多いです。これは寧ろ風を上方に吹き上げる様に、吸気孔の中心が送風孔の中心よりも低位にある方が合理的と考えられているからです。また、起風胴の送風孔に接する部分は、断面的に見て真円とせず、幾分外方にそらした方がよいといひます。次に、翼車は4板の木または紙張りの翼から成り、これが翼車軸への取り付け方には、様々な形態があります。

(4) 選別胴

選別胴は起風胴からの風の通路で方形の断面を有する中室胴です。送風孔からの風は、漏斗から落下する被選別物に当り、之を比重に応じて分別して外部に流れ出ます。

(5) 唐箕使用上の注意事項

この唐箕使用上の注意事項を農民は工夫して次の如くでありました。

- (1)唐箕の末口を風の吹き込まぬ方向に向ける。
- (2)ほこりの多い材料を選別する時や、室内で選別する時は唐箕先に竹棒等を組み渡し、その上にむしろをかけて作業するがよい。この時第三口の風を遮断せぬ様に末の方を高く組むほうが良い。
- (3)選別物の種類に応じて漏斗下落量や、各口境界の調節板の位置および把手の回転数を適当に調節する。
- (4)漏斗内の穀物の途切れることのない様に絶えず補給する。
- (5)把手の回転数はつとめて一樣にする。
- (6)翼車軸には時々注油する。
- (7)作業終了後は翼車を急速に回転して、内部に塵埃や残留物のない様に注意する。

など使用上の注意をしました。

[最終頁に続く]

卯杖・卯槌と削り懸けについて

—『諸国風俗問状答』に現われた二つの習俗の共通項—（続き）

奥野義雄

□『諸国風俗問状答』にみる削り懸けの習俗

削り懸けが山の神の祭具であることは、現行の山の神まつりの習俗伝承から窺えるが、かつては正月行事に各家の門口（戸口）に付けられていたものであった。

江戸時代には、この削り懸けが、どのような内容のものであり、その形状はいかなるものであったのかを、『諸国風俗問状答』から窺ってみることにしたい。

まず、『諸国風俗問状答』の内、削り懸けについて記載されている七例ほどを次に挙げてみることにする。註①

- 1) 「陸奥国白川領風俗問状答」の場合
けづりかけはいたし候ものも有之候へ共、まほ玉は曾て無之候。
- 2) 「常陸国水戸領風俗問状答」の場合
家々にて致、農商には行はさるも有。廿日の風にあてぬやふ取去るへしといふ。いつと忘れていつまでも有家もあり。※項目に「けづり下」とあるが、「けづりかけ」のことであろう。
- 3) 「越後国長岡領風俗問状答」の場合
是も勝軍木も削、門戸に懸る。十四日にかけて廿日にはづし侍り。民間におほかた侍り。
- 4) 「三河国吉田領風俗問状答」の場合
○あり。多くは松の木を以て作る。稀にはニハトコの木にても作る。門入口などにかけおくなり。
- 5) 「大和国高取領風俗問状答」の場合
十四日、門口にかけ候事。
- 6) 「備後国福山領風俗問状答」の場合
藩士の家には有之、農家には門松にて仕候も有之、又山入の時、一尺計に木をきり、皮を五つに削りかけ候も有之候へ共、稀なるかたに御座候。京都祇園社のけづりかけと申様の事は無御座候。

7) 「肥後国天草郡風俗問状答」

なし。はるまんぢうとて、柳木を壹尺余り伐り、皮をさり、両木口よりけづりかけ、中程けづりため、それ持ちて、子供花嫁のしりを打也。打たせざる時は、家の壁を崩しなどして、正月十四日のゆうべ打也。又是を持て菓の木の皮を打也。かくすれば実のるといひ伝へてする也。若し此事にてはなきや。

以上、七つの「風俗問状答」から削り懸けに関する記載を挙げたが、2)～6)までの史料をみるかぎり、正月十四日に門口に懸けられたことが分かる。

また、削り懸けの木は、勝軍木、松、ニワトコなどを一尺（33cm）ほどに切ったものであったことも窺える。そして、削り懸けの形状は二種類あるようで、一尺ほどに切った木の片方の先端から削っていったものである。

7)の史料の肥後国天草郡の場合、「削り懸け」はないと明示されているが、一尺ほどに切った柳の木の両端から中央部まで削ったものを尻打ちに用いていたのである。これが「削り懸け」と称されるものかは判断しかねている。

だが、記載されている文言をみるかぎり、木の両端から中央にむけて削られているようであり、註②「はるまんぢう」といわれるものの形状から「削り懸け」と称しても差し支えないかもしれない。

このことはともかく、肥後国天草郡でおこなわれていたような削り懸けは、正月十四日（十五日）の小正月行事に用いられるものであること以外に、削り懸け⇔尻打ち（この関連以外にも、山の神の祭具や成り木責めの木としてのかかわりも想定し得る）という関係が成り立つことも窺える。

肥後国天草郡と同様な記載は、「備後国品治郡風俗問状答」の削り懸の項にもみえる。

すなわち、

在中にては松の木を割木とし、是を消り^(削)かけ、火を改て雑煮を炊き申候。又豆幹をそへ炊き申者も御座候。けつりかけ仕候者、多は無御座候。鬼打木をけつりかけと心得へ候者も御座候。

(追筆)

五月五日にけつりかけと申は造り胄を申候。

又処に寄、ももの木などの丸木^(ママ)をのしもとをけつりかけ、門松にかけ候も有之。又十五日にかゆの木とてちさきしもにて女の腰打戯れ候事も御座候。

というのがそれである。註③ 備後国品治郡の「削り懸け」といわれるものは、松の割り木にしたもので、雑煮を炊くときに用いられたものであり、通常の「削り懸け」と異なるかもしれない。しかし、正月の門松に懸けるものや十五日に粥の木と称されるものを、「削り懸け」と呼んでいたのかもしれない。そして、粥の木は、女性の腰打ちとして使われ、さきの尻打ちと同様なものであろう。

さらに、6)の史料をみると、備後国福山領の記載にあった「山入の時」に、一尺ほどの削り懸けが用いられたことが窺える。この山入りがいつの頃の時期かは明確でないが、「削り懸け」が祭具として用いられたのであろう。

この情況から、削り懸けと山の神との繋がりが考えられるが、一史料の記載のみでは即断はできないかもしれない。

このように正月十四日(十五日)に門口に懸けておく削り懸けは、尻打ちあるいは腰打ちにも使われていたことが、7)の史料の「肥後国天草郡風俗問状答」や「備後国品治郡風俗問状答」から窺える。

さらに、削り懸けの本来の習俗とは異なった尻打ちあるいは腰打ちなどとともに、粥の木や成り木責めの行事習俗にも用いられていたことが、『諸国風俗問状答』によって理解し得るのである(山の神の祭具としての使用も今後の複数史料の抽出によって明らかとなる)。

生活史料集成・第9巻所収)

註② ここに記載されている「削り懸け」の形状、すなわち一尺ほどの柳の木の中央まで両端から削り懸ける形は、祭礼の太鼓踊りなどに使われる太鼓のバチの形状にも似ている。両者の関連性の有無の検討も必要ではないかと考えられる。

註③ 平山校訂、前掲書

備後国品治郡の削り懸けの記述で、五月五日の作り物の胄を削り懸と呼ぶ事由も今後考えていくべきかもしれない。

□卯杖・卯槌と削り懸け習俗の共通項

卯杖・卯槌は宮中の正月行事の一つであり、卯杖・卯槌をもって疫神・疫鬼を避けるものであった。

そして、『諸国風俗問状答』から、江戸時代の人びととも同じ想いで、正月行事として卯杖・卯槌——実際には「卯杖・卯槌」の行事であると認識されていないようであるが、「風俗問状」に対する「答」として、現実におこなわれている「尻打」「腰打」などの行事に比定されたと考えられる——といわれる行事をおこなっていたことが分かる。

一方、削り懸けは、正月十四日あるいは十五日に家々の門口に懸けられて、おそらく一年の無病息災(疫神・疫鬼を避ける)を願ったものであろう。そして、削り懸けは、この日に「尻打(腰張)」という習俗にも用いられていたこと、「かゆの木」に使われていたこと、そして「山の神」の祭具として奉納されていたらしいことが、『諸国風俗問状答』によって窺える。

したがって、正月行事である卯杖・卯槌と削り懸けは、江戸時代に諸国でおこなわれていた〈尻打ち〉という習俗で繋がっていたことが理解し得る。

言い換えると、削り懸けは〈尻打(腰張)〉を共通項として、卯杖・卯槌と習合する要因を内在させていることが、『諸国風俗問状答』によって提示し得る。

とくに、削り懸けは、尻打ちや腰張りの習俗以外(小正月の粥の木、山の神など)とも習合し得る特質をもったものであるといえる

註① 平山敏治郎校訂『諸国風俗問状答』(日本庶民

であろう。

□結びにかえて

『諸国風俗問状答』によって江戸時代には、卯杖・卯槌と削り懸けは、〈何かの〉行事あるいは祭礼習俗と繋がっていたことが理解できる。

また、別の視点からみると、小正月の小豆粥の行事と、山の神まつり(?)が、削り懸

けまたは卯杖・卯槌の習俗を核に繋がっているとも考えられる。

このように祭礼や年中行事の諸習俗は、祭具・用具を含めたものと関連し合っていることが想定し得る。そして、そこには、江戸時代の民衆の思考を解き明かすべき一つの手立てが、諸習に内在しているとも考えられなくはないであろう。このことを提示して結びとしたい。

(2001年1月31日稿了)

[4頁から続く]

日本における唐箕の歴史

日本の唐箕の歴史の形態を示す文献の初出は、正徳二年(1712)の『和漢三才図会』(寺島長安編)です。それより前には、先に述べた、貞享五年(1688)に出版された井原西鶴の『日本永代蔵』に、大和の農民、「川ばた九介」の知恵から開発されたものと書かれています。はたしていつから使われ始めたのでしょうか。

唐箕の実物で絶対年代の判明するわが国で最も古いものは、京都府立総合資料館が所蔵する明和四年(1767)銘の唐箕です。この唐箕は、京都府船井郡八木町の平井敬一郎が使用したものであったと伝えられます。このほか、江戸時代の年号が付された唐箕が少なからず現存していますが決して多くありません。これらの年号と地域名とを略記すると、次のとおりです。明和年間(1764-72、京都)、寛政年間(1789-1801、熊本)、文化年間(1804-1818、兵庫・岐阜・埼玉・福島)、文政年間(1818-1830、熊本)、天保年間(1830-1844、

兵庫・岐阜・埼玉・山形)、弘化年間(1844-1848、奈良)、嘉永年間(1848-1854、愛知・福島)、安政年間(1854-1860、奈良・熊本・東京・茨城・群馬・福島)、文久年間(1861-1864、兵庫・奈良・茨城)、慶応年間(1865-1868、栃木・福島)。以上、江戸時代の年号を有する唐箕です。今日残る唐箕から江戸時代後期にかなり普及したと思われます。

『私家農業談』(1788年)にはこの唐箕がひろくもちいられ、「無_レ之家には人毎にそしり立て、男女奉公を嫌ひける」ほどであったと述べられており、唐箕の普及を伝えています。『飛州地方御尋答書』(1727年享保12)には、「箕と申にてぬかを去申候、唐箕と申も用候得共、所持仕候者少々ならでは無_二御座候」とあり、唐箕は存在していても、結局この当時にあつては男女奉公人を入れるような上層農家のみ限定されていたのではないかと思います。最初は、使用人をやとい入れる上層農民が唐箕を手に入れたものでしょう。

(以下次号)

■収蔵品展

奈良県の古農具(大和の農村と農業技術史)
風を生み出した箱-唐箕-

平成13年12月8日(土)~平成14年9月1日(日)

[期間中の催し]

■民俗博物館講座

「西鶴『日本永代蔵』に描かれた大和の農民」
(定員60名)

日時 平成14年5月26日(日)午後1時30分から

講師 龍谷大学名誉教授 宗政五十緒氏

■ワークショップ

「箕と唐箕から」

日時 平成14年3月16日(土)2時から

「唐箕からみえる農村」

日時 平成14年4月27日(土)2時から

(当館主任学芸員 浦西 勉)

奈良県立民俗博物館

〒639-1058 奈良県大和郡山市矢田町545(大和民俗公園内)

T E L .0743(53)3171 F A X .0743(53)3173

開館時間:午前9時から午後5時(入館は4時30分まで)

休館日:毎週月曜日(月曜日が祝日に当る場合は開館、翌日休館)

年末年始(12月28日から1月4日)

博物館観覧料

| | | | |
|---------|------|------|-----|
| | 大人 | 学生 | 小人 |
| 個人 | 200円 | 150円 | 70円 |
| 団体(20名) | 150円 | 100円 | 50円 |

公園・民家 無料

交通案内 近鉄郡山駅 1分 奈良交通バスターミナル①のりば
JR郡山駅 15分 「矢田東山」下車北へ徒歩7分

無料駐車場あり(乗用車118台、バス18台、身障者優先3台)